# ウィーンのジャポニスム（前編）
# 1873年ウィーン万国博覧会

西　川　智　之

## 1862年ロンドン万国博覧会

世界で最初の万国博覧会が1851年にロンドンで開かれたことは有名であるが、これはペリーがやって来る２年前のことであり、鎖国中の日本は当然それには参加していない。次の1855年のパリ万博にも日本の参加はなかった。万国博覧会で日本の名前が出てくるのは、1862年のロンドンでの２回目の万国博覧会（International Exhibition of 1862）である。この万博では、開市開港延期交渉のために折からちょうどヨーロッパを訪れていた幕府の使節団が開会式に参列して注目を浴びたりしたが、出品された品物のほとんどすべては、1859年に日本に着任したイギリスの初代駐日公使オールコックが収集したものであった。彼自身は難を逃れたものの、1861年には公使館の置かれていた品川の東禅寺が水戸浪士に襲撃されるなど、攘夷運動が激しい中、1859年－1864年の日本滞在中に（1862年に一時帰国をしているが）、オールコックは北は函館から南は長崎まで日本各地を訪れ、1860年には外国人として初めて富士山に登ったことでも知られている。オールコックは、陶磁器や漆器など自分が日本で買い求めた品物や、日本での旅の途中に収集したものを中心に出品しているが、その中には公使館襲撃事件の時に犯人の一人が持っていた短刀や、函館の鉱山を訪れた時に手に入れた鉱石、あるいは富士登山の際に拾った溶岩なども含まれている[1)]。

『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』には、そのロンドン万博の日本コーナーの挿絵が載っているが（図１）、左右に吊り下げられた大きな提灯の間に、ひょうたん型の大きな花瓶や大皿が置かれているのが目につく。花瓶も大皿も、一番大きなものは２フィート（60cm）あり[2)]、後述するように、ウィーン万国博覧会での185cmの花瓶や２間もある提灯、名古屋城の金鯱など大型の展示物で観客の注意を引くという展示方法の原型がここに読み取れるかもしれない。

しかし、この挿絵で我々を一番驚かせるのは、展示コーナーの左右に大きくスペースを占める蓑笠である。美術工芸品と蓑笠を並べて展示するなどという発想は、多分日本人には思い浮かばないであろう。欧州使節団の一員として会場を訪れた淵辺徳蔵は、日本の展示品を見て「全く骨董店の如く雑具を集めしなれば見るにたえず」[3)]と不満を露わにしているが、こうした視点のずれにこそジャポニスムが生み出される要因があった

**図１　『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』に載った**
**1862 年ロンドン万国博覧会日本展示コーナー** [4)]

のではないだろうか。ウィーンのジャポニスムの源のひとつは、ウィーン万博で持ち込まれた布地や染色用の型紙であったが、こうした日本では博物館などに保存されることもなく捨て去られていくはずだったものが、ヨーロッパで以外に大きな影響を残しているのである。

同じく使節団の一員であった福沢諭吉は、淵辺よりも一月早くロンドンに到着し、万博会場を訪れているが、「物の数甚少し。唯漆器、陶器、刀剣、紙類、其外小細工物のみ。」[5)]との感想を残している。確かに、オールコック個人の収集に頼った第２回ロンドン万国博覧会の日本の展示は、その規模や質の点では後のパリやウィーンに劣るかもしれないが、会場に時々姿を見せるちょんまげ･帯刀の日本人の珍奇さとも相俟って[6)]、ヨーロッパ人に日本を印象付けるには十分な展示であったようである[7)]。

## 1867年パリ万国博覧会

日本の万博への参加は、正式には、1867年のパリの万国博覧会（Exposition Universelle）に、徳川幕府・薩摩藩・佐賀藩が参加したのが初めてとなる。フランスから参加を勧められた徳川幕府は、各藩に特産物の出品を呼びかけたものの、結局それに応じたのはこの２藩だけであった。むしろ関心を示したのは商人で、中でも江戸の清水卯三郎は様々な品を集めただけでなく、割り当てられたパビリオンを茶屋に仕立て、江戸柳橋の芸者がそこで茶をもてなすなどして大いに話題を呼んだ[8)]。

出品されたのは、陶磁器、漆器、刀剣、屏風、浮世絵などの美術工芸品のほかに、人

形、提灯、扇子、布、和紙、さらには農機具や木材などの日用品や原材料も含まれており、かなりの数にのぼった[9]。会場であるシャン・ド・マルスには、巨大な楕円形の産業館が建てられ、参加国はそれぞれ放射線状に並べられた。日本･中国（清）･タイ（シャム）には、ペルシアとエジプトの間に、３カ国でひとつの展示スペースが割り当てられたが、出品物が多かったため、与えられた区画の半分以上を日本で使用することになった[10]。

幕府は出展を決めただけでなく、当時14歳の少年であった、将軍慶喜の弟徳川昭武を代表とする使節団をパリに派遣した。万博終了後も昭武をヨーロッパに留学させて、遅まきながらも西洋諸国との関係改善に役立てようとの思いがあったのであろう。

使節団の一員には、その後の日本経済の基盤を築いた渋沢栄一も加わっていた。渋沢栄一はその旅の様子を『航西日記』に詳しく記録しているので、ここでは彼の日記を元に1867年のパリ万博の様子を再現してみよう。

渋沢栄一は６月20日に万博会場を見学している。楕円形のメイン会場の配置や展示物についての一般的な感想などを日記に記しているが、やはり経済関係の展示には大きな関心を示しており、各国の貨幣の展示を見て、その感想とともに、「世界共通の通貨単位」の将来的な必要性を訴えるためにこうした展示が行われたことも紹介している。また、メイン会場である産業館の周りに立ち並ぶ各国パビリオンについては以下のように書いている。

> 展示場の外縁では、周囲に店を開き、諸州の名産を売っている。茶店酒店は、その国風の服装をした妙齢の美少女をえらんで、数人ずつが給仕にあたっており、客を迎えさせている。米国から出した酒店は、とくに美人がいるというので、遊客も多く集まり、オーストリアの酒店はその女の服装も独特のつくりで、何となく古風である。そのほか、東西各国がそれぞれ趣を異にした風俗でその国産を売るなかに、フランス人で外国風に扮装し、未開の風俗をまね、奇を好む客を引いて奇勝を博そうというものもある。[11]

渋沢の日記には、当時のヨーロッパの新聞記事の翻訳もいくつか残されているが、そのうちのひとつでは、日本の出品物が「全アジア中で、もっともよく準備され、みごとな」ものであると評されている[12]。ちなみにこの記事では、日本の漆や日用品・工芸品に用いられる図案なども紹介されているが、面白いのは、キセルについて詳しく説明している点である[13]。別の記事では上述した清水卯三郎の茶屋のことが取り上げられているが､そこでも三人の日本女性がキセルでタバコを吸う様子を次のように報告している。

> 家はふたつに区画され、中に廊下を設け、入り口の方は飯台を設けて茶酒を客に供している。奥の方には三人の少女、おすみ、おかね、おさとというものがいる。あるいは独楽のようなものをもてあそび、または国の風習にしたがって、小管をもってタバコをふかして時をすごしているようである。その管は、タバコがひとつまみしかはいらず、わずかひと吸いで尽きてしま

うので、何回か、つめなおして吸うのである。[14)]

タバコを詰め、一服してはキセルをポンとたたいて灰を落とし、こよりでやにを取る様子は、異国の人間にとっては、まるで手品のように映じたであろうことは想像に難くない。このように、メイン会場での各国の展示とは別に、パビリオンを建て、そこで各国が独自の演出で自国をアピールするという形式は、この1867年のパリ万博で初めて導入され、その後も引き継がれていくことになるのだが[15)]、当時の新聞の反応などを見ると、芸者を使ったキッチュともいえるこの日本のパフォーマンスは、大成功だったと言えるのではないだろうか。

ところで、パリにやって来たのは、何も万博関係者ばかりではなかった。万博期間中には、日本の曲芸師たちもパリにやって来て、未知の国である日本をヨーロッパにアピールした。松井源水一座と、浜碇定吉一座である[16)]。開国の流れの中で幕府は、1866年に学術修業と商用を目的とする場合に限り、海外渡航を許可した。その最初の旅券を手にしたのが浜碇定吉の一座、次が松井源水であった。ただ、日本からの出国は、松井源水一座が12月２日、浜碇定吉一座が３日後の12月５日であった。彼らは直接パリを目指したわけではなく、源水一座はイギリス各地を、定吉一座はアメリカ各地を巡業してから、それぞれ翌年の７月にパリの劇場で興行を行った[17)]。彼らのパリでの巡業を報ずる三本の記事も渋沢の日記には残されているが、この二組の曲芸師たちが大衆の注目を集めたことは『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』が挿絵入りで紹介していることからも分かる（図２）[18)]。

多くの研究者が指摘するように、1851年にロンドンで始まった産業技術の展示としての万国博覧会は、1867年のパリ万博でのパビリオン群の出現によって「娯楽のシステム

**図２　『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』に載った浜碇定吉一座のパリでの興行（たらい乗りの曲芸）[19)]**

として確立していった」[20] のだが、日本は偶然にもこうした娯楽性の只中で万博への初参加を果たしたのであり、「西洋諸国の異国趣味に強烈にうったえかけた」[21] のだと言ってよいであろう。そしてこのパリ万博の展示は、その後の万国博覧会で、日本が外国、特にヨーロッパ諸国やアメリカに対し、どのように自国のイメージを演出していくかを方向付けていくことになった。

ちなみに、このパリ万博の会期は４月１日から10月１日までだが、まさに同じ年の10月に日本では徳川慶喜が大政奉還を行い、江戸幕府は260年の歴史に幕を下ろしている。

## 1873年ウィーン万国博覧会

### １．準備

ウィーンで万国博覧会を開催しようという動きは、すでに1860年代にあったのだが、1866年の普墺戦争やハンガリーとのアウスグライヒ（和協）のために計画が立ち消えになっていた。計画が再び本格化したのは泡沫会社乱立時代（1867年－1873年）の好景気に支えられてのことであった。1870年５月に皇帝フランツ・ヨーゼフは博覧会開催の申請に署名をし、総裁 Protektor にはフランツ・ヨーゼフの弟のカール・ルトヴィッヒ大公が、理事長 Präsident には甥のライナー大公が就任し準備が始まった[22]。

当時のオーストリアは、普墺戦争でプロイセンに敗れ、大ドイツという選択肢がなくなり、アウスグライヒによるハンガリーとの共存を模索せざるをえなくなったとはいえ、政治的には自由主義陣営が、選挙制度改革・行政改革・市場経済の導入など、リベラルな政策を推し進めていた。そしてその理念が万国博覧会にも反映していた。万博での展示は、26部門に分けられたが、その中でも力が入れられたのは教育部門で、学校教育だけでなく、生涯教育あるいは職業教育などの展示も行われた[23]。自由主義者たちは、1869年には全国小学校法を制定し、教育への教会の権限を排除し、教育制度の整備に力を注いでいた。彼ら市民階級にとっては、教育こそ社会での成功を約束してくれるものであり、万国博覧会はそうした自分たちの世界観の体現でもあった[24]。

会場のプラーター公園には、直径108メートル、高さ84メートルと、円形ドームとしては当時世界最大のロトゥンデ Rotunde[25]（図３）を中心に、全長797メートル、幅48メートルの機械館 Maschinenhalle や、美術品を展示するための芸術館 Kunsthalle、さらには、いかにもウィーンらしいことだが、音楽パビリオン Musikpavillon など大小200ほどの建物が建てられた[26]。参加国は35カ国を数えたが、たとえばエジプトは、名目的とはいえオスマントルコが宗主国となっていたため、チュニジアなどとともにトルコの一部として、また、ハワイは独立した国家として参加している。すでに述べたように、1867年

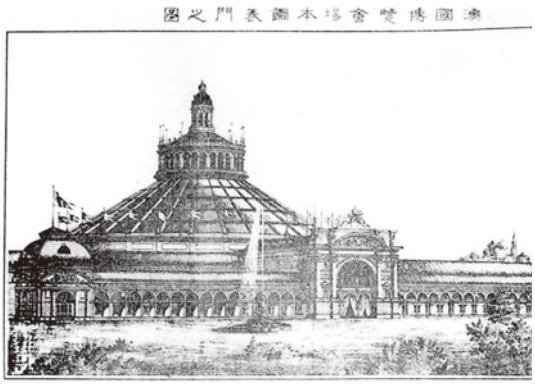
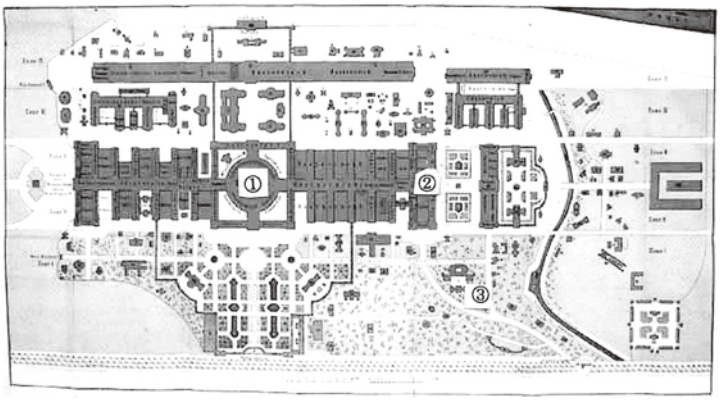



**図３　ウィーン万国博覧会メイン会場ロトゥンデ[27)]**




①がロトゥンデ
②が日本展示スペース
③が日本庭園

**図４　ウィーン万国博覧会会場見取り図[28)]**

のパリ万博では、参加国を放射線状に並べるということが行われていたが、ウィーンはそれをさらに徹底した。メイン展示会場のロトゥンデには、両側に産業館の建物がつながっていた。ロトゥンデでは開催国であるオーストリアとドイツの展示が行われ、その左側にはスウェーデン、ノルウェー、ギリシャ、ベルギーなどオーストリア、ドイツよりも西の国々が、右側にはハンガリー、ロシアなど東の国々が地理的順番で並べられた。産業館の一番左端にアメリカ合衆国、右端に日本、中国、タイの展示スペースがあった（図４）。

このウィーン万国博覧会は、日本にとっては、明治になり近代国家として歩み始めた日本の姿を紹介するデビューの場であった。『墺国博覧会筆記』には、ウィーン万博に参加する目的として次の５つの点が挙げられているが[29)]、しかし、これらの項目のうちウィーン万博での日本のアピールを謳っているのは１だけである。

1．御国内自然の産物と人工にて成りたるものとを出して国土のよろしきと人の工なるとをもつて誉れを海外にあらわし度事
2．各国の出品を見其製作の手続を聞き学芸の精しきと機械の妙とを伝習し我国の産物を行末いよいよ多く且つよからしむるやうなし度事
3．此会によりて御国内にも博物館を建て国内の博覧会を催し人の見聞を広くし智識を、増すやうなし度事
4．物産の製法よろしければ自然他国に賞美せられ遂には其日用になくて叶わぬものともなるへしかくの如くにして以後輸出の数を増すやうなし度事
5．各国必用のものゝあらましを知り諸品の元価売価を探りて後来交易の都合ともなし度事

２～５で強調しているのはウィーン万博後にその経験をどう生かしていくかということである。日本にとって重要だったのは、当時の日本の姿を他国に紹介することよりは、将来輸出に結びつくようなヨーロッパ各国の需要を探ること、つまりヨーロッパの抱いている日本像を明らかにし、それをさらに刺激することだったということがこの記述からも分かる。

『墺国博覧会筆記』によれば、1871年（明治４年）にこれに参加することが決定され、翌1872年から準備が始まったとある。海外に日本をアピールする最初の機会ということで、その意気込みの高さは想像できるが、国を挙げての参加は初めてということもあり、出品物の収集にはかなりの苦労があった。政府は各府県に人員を派遣し出品を促し、また優れた職人とは直接コンタクトを取った。

> 物品ノ採集ハ天産ト人造トヲ論ゼス既ニ五年正月使府縣ヘ特達セシト雖モ到底主意貫徹シ難キニ由リ同年三月ニ至リ物品多産ノ地方ヘハ局員ヲ派遣セシメタリ・・・・・京都ノ織物陶器佐賀縣ノ磁器・・・・・其他東京蒔絵職等ノ如キ後来輸出ノ目的アル物品ニシテ其職業抜群ナル者ハ特ニ之ヲ本局ヘ呼出シ篤ク説諭ヲ加ヘ且多少物品ヲ製造セシメ・・・[30]

また予行演習として、1872年の３月10日から湯島聖堂で博覧会を行っている。この博覧会には、ウィーンでの本番同様に、名古屋城の金の鯱などが展示され、当初の予定の20日間の会期を４月いっぱいまで延期するほどの人気を博し、入場者数は15万人にものぼった。ちなみに、日本に博物館をつくることが、上述のウィーン万博参加目的の三つ目に挙げられているが、湯島聖堂博覧会が行われた湯島聖堂大成殿は、日本で最初の博物館であり、現在の東京国立博物館の前身である。

このように、かなり入念な準備を経て集められた出品物は、1873年１月末にはフランスの郵船に積み込まれ、43名の関係者とともに、オーストリアを目指したが、この43名の中には、上記の第二の目的に挙げられていたヨーロッパでの技術習得を命じられた職人たちや、日本パビリオンとして神社の造営などにあたる棟梁の松尾伊兵衛なども含ま

れていた[31)]。

## ２．開幕

５月１日、王室、貴族、政府関係者、各国の来賓などが出席する中、皇帝フランツ･ヨーゼフの宣言により、ウィーン万国博覧会は開幕する。しかし、開幕はしたものの、展示ブースやパビリオンの中には５月１日にはまだ準備のできていないところがあった。日本もその中に含まれていた。日本は会場の南東の敷地内1.300坪ほどの部分に、鳥居を建て、神社を造り、反り橋のある日本庭園には錦鯉や亀を放ち、鳥居から神社までの道の両側に２軒の店を建てたのだが（図５）、それが完成したのは５月19日。また売店の営業は28日から始められた。５月５日にはエリーザベトと共にフランツ・ヨーゼフが、まだ建設中のこの日本庭園を訪れ、請われるままに橋の渡り初めを行い、また、かんなの削りくずに目を留めて、それを持ち帰ったというエピソードが残っている[32)]。

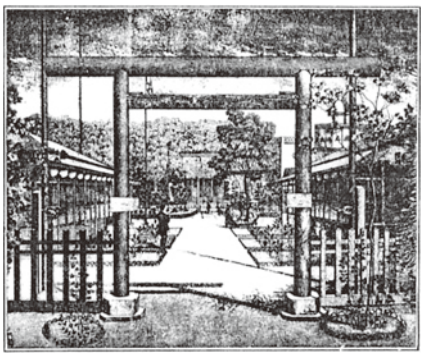


**図５　ウィーン万国博覧会日本庭園[33)]**

産業館での日本の展示も５月１日には間に合わなかった。『澳国博覧会参同記要』によれば、５月17日に展示の半分を開くことができ、全面的にオープンできたのは５月28日になってからであった[34)]。展示されたものは多岐にわたり、浮世絵、伊万里・瀬戸・九谷などの陶磁器や七宝、象眼、金銀細工などの美術工芸品から繭や生糸、西陣織などの織物、和紙、熊の皮や鳥や魚などの標本や、稲などの穀類、海草や様々な植物などありとあらゆるものが出品されたことが記されている[35)]。このウィーン万博では、名古屋城の金鯱や鎌倉の大仏の張りぼて、高さが２間（3.6メートル）もある提灯や、同じく直径８尺（2.4メートル）の太鼓なども展示された[36)]（図６、図７）。また、陶器や漆器、おもちゃなどが売られたが、その売れ行きはすこぶる良かった。扇子や団扇は、『澳国博覧会参同記要』では「一週間で数千本を売りつくした」と書かれているし、ペムゼルの『1873年ウィーン万国博覧会』では、「一日3000本が売れ、需要が多いため値段が開

幕当初の倍になった。日本の扇は流行になり、ウィーン中が扇だらけだった」と紹介されている[37]。

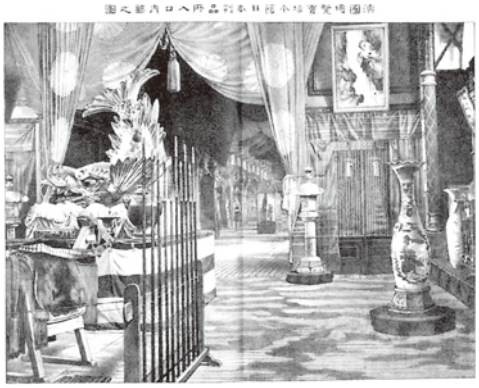


**図６　ウィーン万国博覧会日本展示[38]**

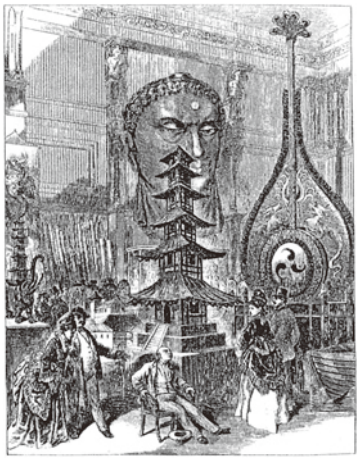


**図７　同日本展示[39]**

こう書くと、ウィーン万博はおおいに活況を呈したように思われるかもしれないが、実はウィーン万博は、万博史上の失敗例として挙げられることが多い。ロトゥンデの建設費用や、人件費の高騰などで、支出は当初予算600万グルデンをはるかに上回る1912万グルデンとなった。それに対し、収入は、1876年までの万博後の施設売却をも含めて、426万グルデンであった[40]。まさに大赤字の万博であった。

けちのつきはじめは、開幕直後５月９日の株価の大暴落である。ホテル建設などの万博需要で何とか持ちこたえていた景気は一気に落ち込み、1873年中には、銀行８行、保険会社２社、鉄道１社、企業７社が倒産した[41]。外国からの観光客を期待して、ウィーンには多くのホテルが建てられたが、ホテル料金が高騰したため、客足は伸びなかった[42]。鉄道の駅では、到着した客の争奪戦が繰り広げられた[43]。

致命的な打撃となったのは、６月末のコレラの流行である。犠牲となったのは、主に、衛生状態のよくない貧しい地区に住む住民たちであったが、新聞報道などの影響もあって、特に外国からの客はウィーン行きを控えた[44]。９月・10月に入りようやく、会場は賑わいを見せるが､時すでに遅しであった。11月２日にウィーン万国博覧会は閉幕する。結局、1000万人を見込んでいた入場者は、725万人にしか達しなかった。

## ３．万博後

ウィーン万博での経験は、1875年の『澳国博覧会報告書』などにまとめられ、1876年のフィラデルフィア博を始め、その後の欧米での万国博覧会に参加する際の、あるいは日本の欧米への輸出振興策に生かされていき、また国内産業の振興を目的とした1877年

の第一回内国勧業博覧会の開催など、具体的な形で実を結んでいく。たとえば、ウィーン万博の際にウィーンで陶磁法を学んできた納富介次郎は、フィラデルフィア万博に際して、前もって欧米諸国に受けそうなデザインなどをまとめ、『温知図録』と呼ばれる陶磁器や漆器などの図案集として配布することを提案し、その図案を元に多くの工芸品が作成され、万博に出品された。まさに、上述の「各国必要のものゝあらましを知り･･･後来交易の都合ともなし度事」という万博当初の目的を実行したのである。

このように、明治政府にとっての万国博覧会は、殖産興業・富国強兵政策の中に位置づけられていたことが分かり、欧米の求める「日本的なもの」を意識し、それを刺激しその欲求を満たそうとするものであった。そしてそのもくろみは当たった[45]。万博に際してウィーンに建てられた神社や日本庭園は、そっくりそのままイギリスの商社アレキサンダー・パーク社が買い取り、ロンドンに移築された。アレキサンダー・パーク社は起立工商会社と契約を結び、買い取った施設を日本製品販売店として利用した。起立工商会社とは、ウィーン万博終了後に、明治政府が工芸品の欧米への輸出を目的に、ウィーン万博に随行した松尾儀助と若井兼三郎に作らせた貿易会社である。起立工商会社は、数多くの名工をかかえ、彼らに輸出用のあるいは万博出品のための美術工芸品の制作にあたらせた。

1867年のパリ万博や73年のウィーンでの万博が、その後のヨーロッパでの日本ブームの一つの大きな契機になったとは、よく言われることである。実際ウィーン万博では、イギリスのウースター製陶所が日本風の陶磁器を出品しており[46]、そのことからも、日本の工芸品に対する関心がすでに高かったことが分かる。

万博に派遣された日本人たちも、ヨーロッパの最新技術を身につけようと懸命であった。万博への公式な参加を断り、香港総領事グスタフ・リッター・フォン・オーヴァーベックらの収集品だけによる出品となった中国と比べると、意欲的な日本人の姿はなおさら目立った。ペムゼルは次のような日本人の姿を報告している。

> 彼らは、ウィーン市内･市外を問わず、学校や工場･工業地域を訪れ、また、1873年のウィーン市役所の定礎式にも参列した。[47]

確かに、万博をはじめとする日本の海外戦略がなければ、その後の日本ブームもなかったであろう。しかし、これにはオーストリアのとった優遇措置に後押しされたという点も無視できない。すでに触れたように、万博会場で売られた日本の品物は非常に売れ行きがよく、日本庭園などもかなりの関心を呼んだ。だが、花や食料品などを除き、みやげ物などを販売することは、原則的には禁止されていた。中近東や極東の国々には、それが例外的に認められていたのである[48]。

また、オーストリアはすでに万博開催中、「オリエント・東アジア委員会 Comité für

Orient und Ostasien」を作り、東洋との経済・文化関係促進を図った[49]。万博の翌年、1874年には、この委員会が母体となりオリエント博物館 Orientalisches Museum がつくられ、ウィーン万博後購入あるいは寄贈されたエジプトやトルコ、日本、中国などの多くの展示物が、この博物館に集められた。オリエント美術館は、その後1886年に、オーストリア貿易博物館 Österreichisches Handeslmuseum と名前を変えるが、コレクションのほとんどは、その後オーストリア芸術・産業博物館 Österreichisches Museum für Kunst und Industrie（現在の工芸美術館 Museum für Angewandte Kunst）に移されている[50]。

それでは、こうして集められた日本関係のコレクションがきっかけで直ちに日本ブームが起こったかというと、そうではない。フランスでは浮世絵をきっかけにジャポニスムがかなり早い時期に起こり、印象派の画家たちに構図や色彩、モチーフなど様々な影響を与えたのに対し、ウィーンのジャポニスムは、世紀転換期頃になってようやく、家具や工芸品のデザイン、雑誌のイラスト、本の装丁など、「応用芸術」の分野で、フランスの印象派ほど目立ちはしないが、大きな影響を与えることになる。本論の後編ではその辺を含め、美術・文学を中心に、ウィーンの世紀転換期の文化に表れる特徴について論じてみたい。

## 注

1）宮内悊「第２回ロンドン国際博覧会と日本の出品物について」70頁、71頁、89頁、96頁参照。九州芸術工科大学一般・基礎教育系列『研究論集』４、1979年、41－108頁所収。

2）同上、65頁、66頁参照。

3）芳賀徹『大君の使節』中央公論社〈中公新書〉1968年、142頁参照。

4）吉田光邦編『図説万国博覧会史1851－1942』（思文閣出版　2004年）、145頁より再録。

5）慶應義塾編『福澤諭吉全集』第19巻（岩波書店　1962年）、28頁。ちなみに福沢は慶応２年に出版された『西洋事情』でも「博覧会」という項目を設け、万国博覧会の紹介を行っている。（同上第１巻312頁参照）

6）『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』は、会場を訪れた日本の使節団の挿絵を載せ、「彼らは、ひっきりなしにこの会場を訪れている」と紹介している。金井圓編訳『描かれた幕末明治　イラストレイテッド・ロンドン・ニュース日本通信1853－1902』（雄松堂書店1974年）、80頁参照。

7）オールコック自身は次のように述べている。「わたしは、漆器や磁器や青銅製品の見本―それらの多くはひじょうに優良かつ珍貴なものである―を集めて、ヨーロッパの最上の細工品と綿密な比較テストにどこまで耐えうるかをしらべるために、大博覧会へおくった。その結果は、けっして日本人の名誉を傷つけることにはならなかった、と思う。」オールコック『大君の都―幕末日本滞在記―』中（岩波書店〈岩波文庫〉1966年）、42頁。

8）1867年のパリ万博への日本の参加については、高橋邦太郎『花のパリへ少年使節　慶応三年パ

リ万国博奮闘記』（三修社　1979年）を参照。また､出品物や会場のパビリオンなどについては、『戸定論叢』第３号（松戸市戸定歴史館　1993年）の「図版1867年パリ万国博覧会関係画像史料」や森仁史「1867年パリ万国博覧会における『日本』―日本出品をめぐって―」を参照。

９）高橋邦太郎　前掲書28－39頁参照。

10）渋沢栄一『航西日記』334頁。中野好夫他編『世界ノンフィクション全集14』（筑摩書房1961年）、291頁－388頁所収。

11）同上337頁。

12）同上346頁。

13）同上346－347頁。

14）同上356頁。

15）吉見俊哉『博覧会の政治学　まなざしの近代』（中央公論新社〈中公新書〉2001年）、71－72頁参照。

16）松井源水や浜碇定吉らの曲芸師たちのことについては、安岡章太郎『大世紀末サーカス』（朝日新聞社　1984年）や倉田善弘『海外公演事始』（東京書籍〈東書選書〉1994年）に詳しく紹介されている。

17）パリでの興行後も、源水一座はベルギー、ドイツ、イタリアなどヨーロッパ各地を巡業するなどして、1870年の２月にようやく帰国している。定吉一座もヨーロッパ各地を巡業後、再びアメリカに渡り、そのうち８名が1869年３月に帰国、定吉を含む９名はその後もアメリカに残り、さらに巡業を続けたようである。源水一座はイギリス人グラントが、定吉一座はアメリカ人のバンクスがマネージャーとして各地の興行の手配を行っていたが、両一座ともこのマネージャーに金を持ち逃げされ、異国に置き去りにされた。何とか興行主を探したりして帰りの旅費を貯め、ようやく帰国した頃には、徳川幕府は倒れ、明治の世の中になっていた。倉田善弘前掲書30－31頁、安岡章太郎　前掲書351－353頁参照。

18）渋沢栄一　前掲書347－349頁、350－355頁、『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』151－153頁参照。

19）吉田光邦編　前掲書146頁より再録。

20）吉見俊哉　前掲書72頁。

21）吉田光邦編　前掲書124頁。

22）Jutta Pemsel: Die Wiener Weltausstellung von 1873, Wien, Köln 1989, S. 18–19.

23）Ebenda, S. 72.

24）「ウィーンでの万国博覧会は、オーストリアの経済、教育関係のブルジョアの関心事であった。彼らは委員会全体で多数を占めていたし、博覧会プログラムのテーマを作成するのにも決定的な影響を及ぼした。それゆえに、博覧会プログラムの文化的な部分に表れているのは、もっぱらブルジョアジーの価値観であった。とりわけここでは、労働を肯定的にとらえ、絶えざる進歩を信じ、家族の社会的な価値を強調するという考え方を挙げることができる。19世紀のブルジョアジーの文化･生活にとって、教育はブルジョアジーが貴族や労働者階級と一線を画し、結束するための不可欠な手段であったことを考えるならば、こうした事実は特に重みを持つであろう。」Ebenda, S. 53.

25）ロトゥンデは、エレベーターと階段を使って屋上の展望テラスへ出ることができた。ロトゥンデは、万博終了後もプラーターに残され、いろいろな目的で使用されていたが、1937年に火災

で焼失している。

26） Pemsel: Ebenda, S. 36ff.

27） 田中芳男・平山成信編『澳国博覧会参同記要』（『明治前期産業発達史資料』第８集２、明治文献資料刊行会　1964年）より。

28） Gerold's ground plan of the Vienna, universal exposition, 1873（国立国会図書館のホームページで公開されている資料 http://www.ndl.go.jp/site_nippon/viene/section1/main.html に拠る。）

29）『墺国博覧会筆記』巻之一、16－17頁（同上の資料 http://www.ndl.go.jp/site_nippon/viene/section3/hikki/ による）。および吉見俊哉　前掲書117頁参照。

30）『澳国博覧会参同記要』上篇　事務處辨、14頁。

31）『墺国博覧会筆記』19頁、『澳国博覧会参同記要』上篇　事務處辨24、34、37頁参照。

32）『澳国博覧会参同記要』上篇　事務處辨、39－40頁参照。この時フランツ・ヨーゼフに橋の渡り初めを頼んだのは、日本の博覧会事務局の副総裁佐野常民であった。佐野は1867年のパリ万博にも、佐賀藩の責任者として派遣された。パリ万博の時に赤十字の活動を知り、1877年西南戦争が起きると赤十字精神に則り、後の日本赤十字社である博愛社を設立した。

33）『澳国博覧会参同記要』より。

34） 同上、上篇　事務處辨、40頁参照。

35）『墺国博覧会筆記』17－19頁参照。

36） すでに述べたように、大きな展示物で注目を引こうとする傾向は、1862年のロンドン万博ですでに認められるが、『澳国博覧会参同記要』（上篇　事務處辨16頁）によれば、ウィーン万博の大型の出品物のきっかけとなったのは、アレクサンダー・フォン・シーボルトの助言であった。アレクサンダーは、あの「シーボルト事件」のフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの長男であり、1867年のパリ万博の時にも、イギリス公使館の通訳官をしていた彼は、ヨーロッパに向かう徳川昭武らに同行している。高橋邦太郎、前掲書20頁参照。

37）『澳国博覧会参同記要』上篇　事務處辨40頁および Pemsel: ebenda, S. 60。

38）『澳国博覧会参同記要』より。

39） Pemsel: Ebenda.

40） Ebenda, S. 22.

41） Ebenda, S. 78.

42） Ebenda, S. 31f.

43） Ebenda, S. 77.

44） Ebenda, S. 79f.

45）『澳国博覧会参同記要』（上篇　事務處辨、７頁）では、明治６年（1873年）と明治29年（1896年）の貿易額を比較すると、その額が５倍になったことを指摘し、「澳国博覧会参同ノ挙ハ此増加ヲ来タセル原因ノ一ニ居ルハ我輩深ク信ジテ疑ハズ」と自負を込めて強調している。

46）『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』197頁参照。

47） Pemsel: Ebenda, S. 50.

48） Ebenda, S. 61.

49） Ebenda, S. 47.

50） Ebenda, S. 90.